

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（三） -初編その3-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20705

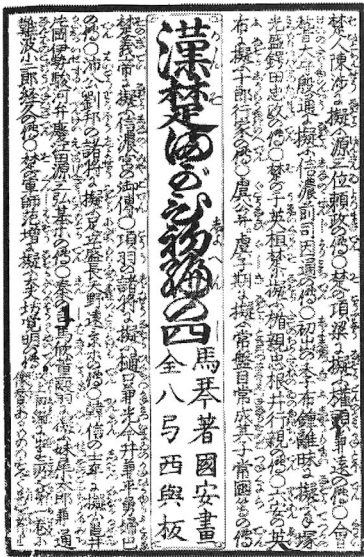
曲亭馬琴 『漢楚賽擬選軍談』 翻刻（三） — 初編その3 —

神田 正行

凡例（摘録。詳細は本稿（一）参照）

- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 二、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名（小字双行の場合が多いが、稀に傍訓もある）は、一部を除いて省略した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、話題が改まる位置に、内容を示す見出しを、◆印に続けてゴシック体で掲げた。
- 一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の詞書は同じ頁の下段に翻字した。
- 一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本（＼133056。改装本）である。虫損や着彩、シミなどが目立たないよう、画像には最低限の修正を施した。

《第四冊 前表紙・同見返し》



(表紙)

※立命館ARC蔵本

曲亭馬琴著／和漢撮合初編下帙
每篇八卷合本／歌川国安絵画／漢楚賽擬選軍談 式

(見返し)

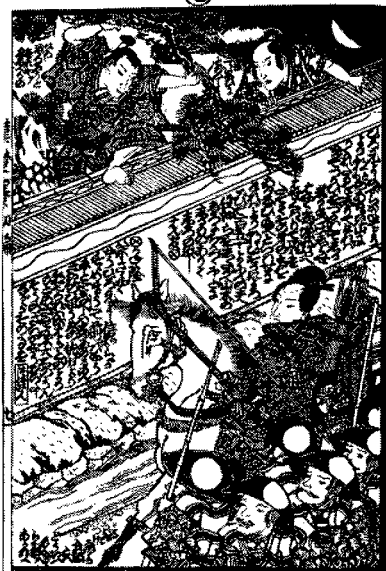
楚人陳涉に擬ふ 源三位頼政の伝 ○楚の項梁に擬ふ 権頭兼遠の伝 ○会稽 太守殷通に擬ふ 信濃前司因通の伝 ○初出の季布・鍾離昧に擬ふ 手塚光盛・鐔田忠政の伝 ○楚の于英・桓楚に擬ふ 榎野親忠・根井行親の伝 ○六安の英布に擬ふ 十郎行家の伝 ○虞公并二虞子期に擬ふ 常盤目 常成・其子常国等の伝

漢楚まがひ初編の四〔馬琴著 國安画〕／全八巻 西与板〕

楚義帝に擬ふ 信濃宮の御伝 ○項羽の諸將に擬ふ 樋口兼光・今井兼平・勇婦巴の伝 ○沛公劉邦の諸將に擬ふ 足立盛長・天野遠景等の伝 ○韓信の士卒に擬ふ 亀井・片岡・伊勢・駿河・弁慶・江田源三弘基等の伝 ○秦の司馬欣・董翳に擬ふ 妹尾小太郎兼通・難波小二郎経久の伝 ○楚の軍師范増に擬ふ 大夫坊覚明の伝 (以上初編に出す所也。第一巻に像賛あるものはすべて是を省り)

(七)

広元・善信らはかねてより、頼朝の天城山に、隠れたるを知りてければ、やがて使ひを遣はして、然々と告げ知らせ、「早く当城へ馳せ加りて、功を立ててその身の科を、贖ひ給へ」と言はせにければ、頼朝秘かに喜びて、百五十余人の夫役らを従へ、山木の城に近付く程に、知る者ありて城の主、判官〇／〇兼隆に囁くやう、「広元・善信らが勧め申して、前兵衛と唱へしは、当国の流人、



(31才 広元ら、城を抜け出す)

前兵衛佐頼朝也。彼は六波羅殿より求めさせ給ふ、大

石の運送の、宰領をいたしながら、その事を次へ(31才)／果たさずして、数多の夫役諸共に、逐電したる曲者也。さらでも源氏の残党なるに、その素性を質さずして、当城へ引き入れ給はゞ、後日の御咎めを如何はせん。よく／＼賢慮を巡らし給へ」と、まめだちて告げにければ、兼隆聞つ、驚き怒りて、「さては広元・善信は、重罪の頼朝を、城中へ引入れんとて、我を欺きしこそ奇怪なれ。疾く／＼城の門戸を閉じて、かの流人を内へな入れそ。憎き者共かな」と息巻きつ、広元・善信を呼び付けて、思ひのまゝに責め罵り、「事鎮まりて後に此奴らが、罪をきと糺すべし。それまでは一間の内に、厳しく閉じ籠め置くべし」とて、件の兩人を引き立てさせ、

前(善)の誤。善信「一思ひに飛ばつし」。ひろ(広元)「ぼつきり折れやアしめへかの。皆「呼び付けながら入れぬとは、どういふもんだ、埒やア明かねへ。」

にはかに諸方の手配りして、ちつとも油断せざりけり。

さる程に頼朝は、山木の城に入らんとするに、前後の門を閉てたれば、遂に又入ること得ならず、剩へ城の狭間より、矢を射出して防ぎにければ、「こはいかに」と疑ひ迷ふて、一町ばかり引退き、重ねて広元・善信が訪れを待つ程に、その日ははかなく暮れにけり。

○されば又広元・善信は、その夜壁をこぼち塀を越えて、城外に忍び出で、ひそかに頼朝に對面して、兩人等しく囁くやう、「城主山木兼隆は、平家の親族たるにより、年來權威を振るひ、民を虐けて猶飽けりとせず。且御身を疑ふて、我々兩人を押し籠めたり。か、れば城に籠る軍民らに、兼隆を怨むる者多かり。今宵城中へ矢文を射込んで、兼隆が罪を責め給はゞ、たちまちに變を生じて、御身に従はんと、欲する者多かるべし。さらば諸人の手を借りて、兼隆を誅せん事、さらに踵を廻らすべからず。疾く／＼用意し給へ」と、示し合はせて兩人は、忍びて城へぞ入りにける。

その時頼朝 ■／■ 思ふやう、「我なまじいに天城山の、

隠れ家を出でて来つるに、今この城へ入れられねば、進退すでに谷りぬ。只広元らが、謀に從ひて、安危をこゝに定めぬ」とて、すなはち兼隆が年來の、悪事はさら也、平家の悪虐を記し付けて、これを矢文として、右の下へ左の上より數多城中へ射込みしかば、城中の軍民ら、皆これを見て秘かに喜び、にはかに示し合はするやう、「かの佐殿は源氏の嫡流、平家に替はりて天が下を、治め給ふべき者也。早く山木を討ち殺して、佐殿に從へや」とて、諸人ひとしく起こり立ちて、あちこちに火をかけつ、城の門を押し開きて、中へ下より頼朝を引入れけり。

か、りし程に兼隆は、この大變に驚き騒ぎて、家の子郎等に下知しつ、しばらく防ぎ戦ふものから、前には頼朝の大敵あり、後ろよりは広元・善信、城の軍民らを励まして、さし挟みて攻めければ、山木が家の子・郎等は、残り少なに討ちなされて、城外指して逃げ失せければ、兼隆も憚えかねて、逃ぐる味方にうち混じり、逃れ去らんとする程に、二人の雑兵走り来て、兼隆を遮り止



(31ウ・32オ 兼隆、討ち取られる)



め、そが一人は矛をもて、兼隆を突き倒せば、一人すかさず走りかゝりて、兼隆が首打ち落とし、切先に貫きて、兩人等しく声高やかに、「源氏の侍 足立藤九郎盛長、天野藤内景廉」(▼ここでは、兼隆を討ち取った加藤次景廉と、天野藤内遠景が混同されている)、世に連れ時の不祥に術なく、民間に落ち下り、心ならずも当城へ、かり入られて、軍民の群れにあり。今佐殿に見参の、引出物に兼隆が、首取つて候也」と、勇みに勇んで呼ば、つたり。落ち遅れたる城兵らは、いよ、ますく驚き恐れて、皆降参をしたりける。

朝(頼朝)「戦の手はじめ勝利の勝ち鬨、鳥も八声

の●／●はや明け方。

足立「ソレ簀の子まで、しつかりものだぞ。

善(善信)「一番鳥の◆／◆一番帳。

広(広元)「いづれもお早い、お手柄く。

天野「敵は山木、九の巻。○／○遠巻きならぬ遠景

が、首をしめこの宇佐美祐茂。

かくて頼朝は、城中の火を消させて、遅れ馳せに馳せ集まる、味方をこゝに待つ程に、次の日次へ(32ウ・33オ)ノ北条時政【呂文】親子、稲毛太郎重成【樊噲】らはさらば、近郷に隠れて、時を待ちたる源氏の侍、岡崎三郎義実、大庭景義、土肥実平、宇佐美祐茂、佐々木定綱、同じく盛綱・高綱ら、皆此所へ馳せ集まりて、頼朝にぞ従ひける。

か、りし程に平家の侍、大庭景親、俣野五郎景久、伊藤入道祐親ら、伊豆・相模の、軍兵をかり催して、攻め寄すると聞えしかば、頼朝すなはち、味方の軍兵を手分けして、石橋山に馳せ向かひ、しばらく挑み戦ふものから、敵は目に余る大軍なれば、心ならずもうち負けて、みな散りぐくになりしかば、頼朝主従わづかに七騎、御船にうち乗りて、上総を指してぞ落ち行きける。

◆兼遠・義仲、因通を討つ

○これはさておき、権頭兼遠は、義仲と相計りて、一族を招き集め、まづ近郷を攻め取らんとて、しきりに軍議を凝らす程に、信濃の国高井・伊奈・筑摩、三郡の領主

なりし、信濃前司因通【殷通】は、同国馬籠山の城にあり、近頃平家を怨むる由ありて、よりく謀叛の鏃を磨ぎぬ。これにより当国なる、智勇の武士を招き寄せて、いかで味方になさばやと、思ふことしきりなるに、権頭兼遠が、木曾義仲を盛り立てて、義兵を起こさんとする由を、伝へ聞て秘かに喜び、ある日使ひを遣はして、兼遠・義仲を招き寄せ、「密義を談合せん」と言はせにければ、兼遠拒む気色もなく、「両三日の▲▲程に参るべし」と、答へて使ひを帰しけり。

その時兼遠は、義仲と密談するやう、「因通は、をさく平家莫大の恩によりて、年ごろ三郡を領しながら、いさ、かの恨みによりて、たちまち謀叛を企つるは、忠義に疎き痴れ者也。しかるを彼に従はゞ、世の豪傑に笑はるべし。明日参会の席上にて、因通を斬り殺さば、かの三郡は我が物也。この義を心得給へかし」と、言ふに義仲領きて、件の用意をしたりけり。

かくてその約束の日に、義仲は、兼遠ともる共に、今井・樋口の両郎等と、供人五六十人を従へて、馬籠山の



(32ウ・33オ 因通、義仲に討たれる)

城に赴きければ、信濃前司因通みづから出で迎へて、書

院において杯を勧め、平家に叛かんと欲する一義を告げ

て、密談に及びしを、義仲聞て眼を怒らし、「汝は平家

の恩を受けて、その恩を思ふ事なく、そゞろに

▲左の上より謀叛を企つるは、不忠不義の至り也。

天罰思ひ知らせん」と、言ふより早く抜き閃かす、刃の

光に因通は、驚き騒ぎ立て立んとせしを、立せもやらずは

たと撃つ、拳の冴へに因通は、頭を打たれて倒れけり。

次の間に集ひるたる、近習の侍騒ぎ立ちて、おつ取り

つば(鏑田)「見逃しがたき主人の仇。

手塚「兼遠・義仲尋常に、

兩人「サア立ち上がつて勝負々々。

遠(兼遠)「不義を誅して大義をのぶるは、勧善懲

悪まことの義兵。

仲(義仲)「逆を去つて順に従ふ、これを名づけて

義士といふ。心を静めてまづく聞かれよ。

兼平「俺が言葉は書く所がなし。御推文字々々々。

籠めて討たんと競ふを、義仲戸口に立ふたがりて、「汝らそらろに騒ぐべからず。我に従ふ者は生きん、敵する者は皆死なん。逆を去つて順に従ふ、心はなきや」と呼ば、つたる、その声雷の落つるが如く、当たるべくもあらざれば、皆々驚き跪きて、降参をぞしたりける。

かゝる所に、近頃客分にて、因通に仕へたる、**次へ**

(32ウ・33オ) / **続き**手塚 太郎光盛【季布】、津波田太郎忠政【鍾離昧】、兩人等しく走り来て、義仲をきつと

睨まへ、「義仲武勇に誇りなせそ。汝は罪もなく怨みもなき、人を害してこの城を、奪はんと欲するは、これ盗賊に異ならず。一日なりとも前司殿の、恩を受けたる ●

我々が、いかでか汝に従ふべき。疾く〳勝負を決せよ」と、言葉等しく息巻きて、詰め寄すれども義仲は、騒ぎたる気色なく、「和殿らかくてもまだ覚めずや。因通が平家に叛くは、これ即ち不忠不義也。我が因通を殺せしは、義の赴く所にて、不義にあらず不信にあらず。各々志を改め我に従ひて、共に平家を討ち滅ぼし、美名を子孫に伝へずや」と、言葉忙しく説き諭せば、光盛・

忠政「げにも」と悟りて、容を改め跪き、「我々眼ありながら、世の英雄を知らずして、因通ごとき小人に、身を寄せしこそ悔しけれ。用ひらるゝ事あらば、犬馬の力を尽くすべし。召し使はせ給へかし」と、言ふに義仲喜びて、兼遠に由を告げ、なほ北国を攻め靡けんと、軍議をこゝに凝らしける。

◆ **楯・根井、義仲に従う**

その時光盛・忠政は、義仲に勧むるやう、「当国高井郡、駒が岳の麓村に、根井大弥太行親【于英】、楯六郎親忠【桓楚】といふ、二人の郷士あり、共に武芸は人に勝れて、万夫不当の勇士なり。彼らを味方に引入れ給はゞ、万卒を得つるに増すべし。しかれども我々も、かねてその名を聞けるのみ、知る人には候はず。早く〳〳右の中へ〳〳左の上より使ひを遣はして、招き寄せ給へかし」と、言ふを義仲うち聞て、「一件の楯と根井らは、世に並びなき勇士ならば、我自ら彼処に至りて、説き勧めて誘ひ来てん。さは」とてやがて野装束して、供人わづかに二人を従へ、忍びて根井が宿所に至るに、楯の六郎も



(33ウ・34オ 義仲、大力を示す)

こゝに来て、武芸を討論してゐたりける。

かくて義仲は、◆／◆この兩人に對面して、姓名を告げ大義を述べて、「今より我に従ひて、大功を立て給へかし」と、しきりに勧めて已まざりしを、兩人は只あざ笑ひて、「平家は悪逆也といへども、その武威いまだ衰へず。しかるに御身は、孤独微力を自ら計らで、平家を滅ぼさんと欲するは、かの螳螂の斧をもて、車に向かふにあらずや」と、言ふを義仲聞あへず、

▲右の下へ／▲

左の上より 遙かに見ゆる駒の岳の、麓の駒石を指さして、

「御辺らあの大石を、一人たやすく持ち運ぶと、平家の大敵を滅ぼすと、いづれをか難しとするや」と、問へば

雑兵「ヲヤ／＼、おつかねへお力だ。」

仲(義仲)「人は一代、話は末代。見ぬ事は話にならぬ。間近く寄つてよく見たく。」

根(根井)・楯「六七十貫目の石を持つてさへ、長銘をきつて●／●人に誇るに、張り子にしても覚えがある。さて／＼、感心々々。」

兩人うち笑ひて、「そもくあの駒石は、高一丈に余りて、横幅六七尺あり。石の表に自ら、駒の形見ゆるをもて、山をも駒が岳と名づけたり。よしや手力雄の命也とも、いかにしてあの石を、持ち運ぶ事なるべきや。かれば平家を滅ぼすと、等しく難き業なるべし」と、言ふに義仲領きて、「しからは各々我らと共に、彼処へ行きて見給へかし」と、言ひつ、もはや立上がりて、石のほとりに赴くにぞ、兩人は心得かたく、思ひつ、後につきて、もろ共に立ち出でたり。

その時 つぎへ (33ウ・34オ) / 義仲は、左右の袖を巻き上げて、件の石に両手をかけ、いと軽やかに引起こして、腰をひねりて肩にうち乗せ、右手に高くさし上げて、幾度となくうち巡り、「いかに、かくても我が力もて、平家を滅ぼしがたしと言ふや。いかにく」と問ふたりける、その声も顔の色も、いさ、か変ずる事もなく、もとの所へたち帰りて、静かに石を据ゑにければ、楯・根井は驚き感じて、等しく地上に跪き、「君は真に凡人ならず、天つ神にてをはするならん。かゝる御手並みを見

し上に、いかでか辞み申べし。召し使はれなば幸ひならん」と、答へてやがて主従の、約をなしてぞ喜びける。

◆義仲、碓井馬と山吹姫を手に入れる

かゝる所に、遠近の百性騒ぎ立ちて、「大原川の川上に、荒馬の出でたるぞや。行くな蹴られぬ」と罵りて、東西に走りしかば、義仲これを訝りて、事の由を尋ぬるに、行親・親忠答ふるやう、「近頃大原の川上に、一匹の黒馬出でて、折々いたく荒るゝ事あり。あるひはいふ、そは駒が岳なる神馬の種也。当国の山々を走り巡りて、久しく碓井峠に居り、近頃はこの地に來たれり。その馬の大きなこと、世の常の馬に倍して、黒き事墨の如し。当国の牧士ら、これを捕らんとて、様々にしたれども、皆ことごとく蹴倒されて、死したる者少なからねば、重ねて捕らんと言ふ者なし。怪有なる馬に候」と、告ぐるを義仲うち聞て、「しからは我又彼処に至りて、その荒馬を乗り鎮めん。各々も来て見給へ」とて、先に立ちつ、諸共に、件の沢辺に赴けば、一叢高き沢荻の、間よりまつしぐらに、かの荒馬の走り出でて、沢に入らんとす



(34ウ・35オ 義仲、碓井馬を乗り鎮める)

る所を、義仲ひらりと飛び乗りて、狂ひ回れどちつとも騒がず、両の足に力を入れて、馬の脇腹を締めければ、さすがの荒馬たちまち弱りて、鼻風を吹くばかり也。その時義仲は、馬を平地に乗り上げて、しばし輪乗りをしてければ、
 ▲右の下へ／＼左の上より馬は身の内より汗を流して、いよく弱り果てにけり。

楯・根井の兩人は、再びこれに驚き感じて、縄もて馬

根(根井)「さて／＼今日は思ひがけない、よい見物をいたしをります。

楯「力持ちも曲乗りも、札銭入らずで奇妙々々。

仲(義仲)「かう飛び乗つてはいつかな／＼、びくともさせる事じゃあねへぞ。

サ(目)「ハテ目覚ましい馬術の達人。あの手際では、立ち乗りもするだらう。こゝから見ておれば、危なげはござりませぬ。

山(山吹姫)「まだ年若に見ゆれども、名たゝる武士であるかいのふ。

を繋ぎつゝ、義仲に相具して、引きて宿所へ、帰らんとする程に、**次**（34ウ・35オ）／一人の老人、凶らずも義仲の、乗り鎮めたる馬を見て、且驚き且感に得堪へず、義仲に向かひて言ふやう、「いと率爾には候へども、君は蓋世の英雄也。御名を聞かまほしけれ」と、言ふに義仲ちつとも隠さず、「我は源 義仲也。そもく和殿は何人ぞ」と、問はれて老人又驚きて、「さては木曾の御曹司にてをはするよな。某 事は松殿



(35ウ 義仲、山吹姫を娶る)

の殿下、基房公の旧臣にて、常盤目 常成【虞公】と呼ばれし者也。なほ申すべき事あれば、宿所へ寄せ給へ」とて、庵に誘ひて又言ふやう、「某に一人の養ひ君あり。そは殿下の息女にて、山吹姫【虞姫】と称へ申すが、今年二八になり給ひぬ。妾腹にてましますば、人の妬みのやる方なさに、常成に給はりて、この山里へ下され給ひぬ。しかるに君は源家の歴々、婿君となし参らせなば、いと相応しき縁ならん。この義を受け引き給へ」とて、山吹姫を呼び出だして、義仲にぞ会はせける。

義仲の姫上を見るに、類稀なる美人なれば、喜べる

サ(目)「娘とは申せども、まことは御主君殿下の姫上。娶らせ給はゞ／＼／＼老いの喜び。重荷を下ろす心地せん。とかくに即坐のお返事を、願はしう存じますてや。

仲(義仲)「器量といひ氏といひ、我が妻にして不足なき、縁談なれば辞むに由なし。おつ、け迎ひをおこすぞや。

のみ異義もなく、近くに娶るべき由を、常成に約束して、刀に着けたる、笄かぢがいと印籠いんろうをもて、当坐あたゝの印しるしに残し置き、その夜は根井が家に宿りて、次の日行親・親忠らを伴ひて、件くだんの馬を牽かせつゝ、馬籠めこめの□右の下へ／□左の上より出城に帰る程に、此度こたび図らず良き馬と、美人を娶り得たる喜びに堪へず、彼の馬は、碓井峠に居りしといへば、即ちこれを碓井馬ぼ【烏騷】と名づけ、又一名を信濃黒とも称ととへさせて、寵愛世の常に過ぎたり。されば出陣たひごの度毎に、此碓井馬にうち乗りて、一度も不覚を取らざりしは、主ぬしと馬と一对の、優れ物なればなるべし。

(35ウ)

(八)

◆行家、義仲に服す

権守中原兼遠は、信濃しなの前司因通を討ち果たして、一時に信濃しなのの、三郡を得たりしかば、「この勢ひを抜かずして、なほ一国を平均せん」とて、義仲に一千余騎の、兵つばものを授けつゝ、同国あつし◆「安曇」カカの郡ごほりの、敵を討つべしとて遣はしけり。既にして義仲は、筑摩郡ちくまのこほり小木曾の里をうち過ぎて、寄合よりあが岳を越えんとする程に、桔梗が原の方よりして、一手トの軍馬出で来れり。その勢およそ四五百人、たちまち道を横切りて、遮り止めんとしければ、義仲まつ先に馬を進めて、「来たれる者は誰人たれなるぞ、名乗れ聞かん」と呼ば、つたり。敵の大將これを見て、轡たもとづらをおし向けて、進み寄りつゝ、声を振り立て、「我は十郎源 行家みなもと【英布】也。年ごろ美濃・尾張おはひの間にあり、仄かに聞くに兼遠・義仲、虎狼の心をさし挟みて、前司因通よしみちを討ち果たし、馬籠めこめの城を▲中へ／▲上より奪うばひし事、風聞隣国まで隠れなし。汝ら無名の戦いくさを起こして、わづかに三郡さんを奪うばひ取る共、都より、

討手の大軍押し寄せ来たらば、石をもて、卵を庄すに似たるべし。さるをなほ、飽く事を知らずして、隣国までも攻め従へんと、欲するは片腹痛し。よりて汝を遮り止めて、**○下へ** **○中より** 勝負を決せん為に出で来たれり」と、言はせもあへず義仲は、からくとあざ笑ひて、「愚か也源十郎、我は是先つ頃、高倉宮の令旨を賜はり、平家を討たんと義兵を起こせり。無名の戦と**つぎへ**」(36オ) / いふべからず。和殿も源氏の流れなるに、君父の



(36オ 義仲、行家と対陣する)

義仲

行家

仇たる平家の為に、我と戦はんと、欲するはいかにぞや。速やかに降参して、不測の功を建てられよ」と、理せめて説き諭せば、行家たちまち後悔して、慌てふためき馬より降り立ち、義仲の辺へ来て、一味合体の由を告げにければ、義仲すなはち行家の、一手を後陣に備へさせ、進みて寄合が岳を越えんとする程に、馬籠の城より兼遠の、使ひ馬を飛ばし来て、「一まど帰陣し給へ」と告げしかば、義仲は訝りながら、行家を伴ひて、馬籠の城に歸りにければ、兼遠これ待ちつけて、「にはかに呼び返せしこと、余の義にあらず。先に都へ遣はしたる、忍びの者歸り来て、源三位頼政【陳勝】親子は、往ぬる日宇治にて討ち死し、高倉宮も流れ矢の為に、失せさせ給ひぬと告げたり。か、れば国々なる源氏は聞怖して、二の足を踏むなるべく、平家はいよく、勢ひ猛くなりて、鋒先日頃に十倍すべし。しかるを和君は知らずして、敵地に深入りをし給はゞ、過ちあらん事を恐れて、呼び返



(367・37才 頼政一家、平等院で自刃)

し候也」と、言ふに義仲嘆息して、件くだんの忍びの者を招き近付け、頼政親子の討ち死の、為ため体を尋ね問ふに、その者答へて、

◆頼政の最期

「さん候、頼政卿・仲綱朝臣あそん、平等院に立て籠りて、宇治橋を絶ち落とせしかば、平家は汀みぎはに陣取りて、矢戦やいくさにのみ日を送る程に、逸り雄おとこの若武者らが、川を渡さんとして渡し得ず、押し流され水に溺れて、死する者多かりしを、仲綱朝臣あざみ笑ふて、

弥や(弥太郎盛兼)「敵混み入らばその甲斐なし。御

髪かみを□/□隠さん、ヲ、それよ。

兵「覚悟はよいか、

兵「南無阿弥陀仏。

頼より(頼政)「仲綱ははや自害せしな。遅れやはする、

介錯頼むぞ。

藤とう(下河辺藤三郎)「是非に及ばぬ、■/■南無阿

弥陀仏。

へ伊勢武者はみな緋織の鎧着て

宇治の綱代にかゝりこそすれ

と ▲右の印へ ▲左の上より 詠み給ひにき。

かゝりし程に、下野の国に住人、田原又太郎忠綱が、ま
つ先駆けてかの大河を、おし渡したるにより、平家の大
軍我もくくと、人筏を組み波を抜きて、向かひの岸に群
がり上りし、勢ひ当たるべくもあらず。宮方もこゝを
先途と、□左へ □右より しばらく挑み戦ふものから、

敵は数万の大軍なれば、射れども突けども物ともせず、
味方は次第に討ち死にして、今はかうよと見えしかば、
頼政すなはち、高倉宮を馬に乗せ奉り、兵、少々さし添
えて、奈良へ落とし奉り、頼政親子は、平等院へ引籠り
て、腹十文字にかき切りて、同じ枕に臥し給ひぬ。頼政
卿の辞世の歌、

へ埋もれ木の花咲く事もなかりしに

身のなる果てはあはれ也けり

頼政の御首は、下総国の住人、下河辺藤三郎行吉が、

直垂の袖に包みかき抱きて、何地ともなく ○右の下へ

○左の中より 落ちてゆきぬ。又仲綱の御首は、因幡国の
住人、弥太郎盛兼が深く隠して、遂に敵には取られざり
けり。

されば近習の者共は、追ひ腹を切るもあり、差し違へ
て死するも多かり。かくて頼政の、子息達をはじめとし
て、丁七唱なんど呼ばれし、一人当千の家の子・郎等、
皆ことごとく討ち死して、屍は馬蹄の塵にまじはり、名
は宇治山より高かりける。

さる程に、敵隙間もなく、次へ (36ウ・37オ) / 落ち
人を追ひ討ちしかば、宮も流れ矢に当たらせ給ひて、や
がて失せさせ給ひけり。寄せ手の大将重衡は、さらに南
都へ押し寄せて、東大寺・興福寺を焼き討ちせしかば、
聖武天皇の御願と聞えし、靈場伽藍たちまちに、灰燼と
なりて失せにけり。こは奈良法師が頼政の、味方したる
を宗盛の、いたく憎みしによつて也。浅ましかりける事
にこそ」と、息つきあへず物語るを、義仲つらくうち
聞て、思はずも吐息を吐き、「頼政は源家の嫡流、此度
義兵の嚆矢なりしに、時運によるとはいひながら、諸方

の味方合期せで、孤軍なりしは惜しむべし。しかりとて今さらに、居つ、大敵を待たん事、謀なき者に似たり。各々所存はいかにぞや」と、問ひつ、左右を見返れば、十郎行家進み出て、「味方に智謀の軍師あらば、大敵も亦恐るゝに足らず。只その人の得がたきのみ」と、言ふに兼光も進み出でて、義仲に告げて言ふやう、「越前なる金が崎の辺に、大夫坊覚明【范増】といふ法師あり。はじめは南都の学侶なりしが、後に叡山の雲母谷にをり、そこにも亦住みわびて、北国を行脚せしが、近頃杖を、金が崎の浦曲に止めて、草の庵を結びて住めり。この人儒・仏・道家の、三教を見破りて、博識強記類、少なし。なかんづく、孫子の兵法を好みて、智謀世の常に優れたり。只これのみにあらずして、文章もよくて能書なり。先に当国に行脚せし時、巴は彼に手本を乞ふて、しばらく習ひ候ひき。こゝをもて、某も覚明が、豪傑なるをよく知れり。齡七十に及べども、立ち振る舞ひに健やか也。彼を招き重く用ひて、当家の軍師とし給はゞ、大事必ず成就せん。さるを今招かずして、他人の為に用ひられな

ば、後悔そこに立つべからず」と、言ふを義仲間あへず、「我も覚明が才ある由を、かねて伝へ聞たりしに、事に紛れて忘れたり。兼光は巴を具して、早く金が崎へ赴くべし。巴は女■の事ながら、彼が手迹しゅせきの弟子ならば、親しみも深かるべし。よくせよかし」と命ぜらる。

◆義仲、覚明を軍師とする

○さる程に、樋口次郎兼光は、妹巴いまとともる共に、供人らに義仲の、贈り物をもたらして、覚明が閑居せる、金が崎の庵に赴き、すなはち主命しゅめいを、覚明に述べ伝へて、数多の贈り物をぞ進めける。その時覚明は、腹の内に思ふやう、「我仏門に入りしより、▲右の下へ ▲左の中よりこ、に六十有余年、いまださせる功德なし。かゝれば、今、英雄良將の助けとなりて、乱れたる世をうち治め、民の塗炭を救ひなば、その功德莫大なるべし。しかれども我いまだ、義仲の人となりと、武運の吉凶を知らざれば、これらの由をよく考へて、有無の答へをすべけれ」と、思案をしつ、兼光に言ふやう、「我は出家の事にして、齡よほひもいたく傾きぬ。さりながらかくの如き、懇命も



(37ウ・38オ 樋口兄妹、覚明を説く)



源頼朝

亦黙しがたし。[次へ (37ウ・38オ) / 和殿ら今宵はこ、
に宿りて、明日の朝まで待ちねかし。今宵我よく考へて、
御答へに及ぶべし」と、言ふを兼光聞あへず、「そは宣
ふ事ながら、さる緩やかなる事にはあらず。近頃源三位
頼政親子、宇治にて討ち死にし給ひしより、平家の大軍
遠からず、押し寄するといふ風聞あり。この故に夜を日
に継ぎて、走りてこ、へ來つれども、なほ義仲の待ちか
ねて、をはさんとこそ思ふものを、願はくは今即坐の、

樋口「眉に火のつく火急の懇望。何御思案が入りま

せうぞ。後とも言はず○／○即坐の御返事、こ
の書入れと同様に、諄ふもく願ひ上げます。

巴「娘の時にお手本を、戴きましたる師弟のよしみ
に、女子だてらな副使の役目。この品々空御辞
退なく、お受けなされて下さりませ。

覚「輕諾は誠少なし。とくと思案を定めねば、その
賜物は受けられぬ。明日まで待たれよ、しばら
く〜。

答へを聞かせ給へかし」と、巴もろ共ひれ伏して、託言がましくかき口説けば、覚明感して猶予も得ならず、遂に義仲の招きに応じて、贈り物を受け納め、「明日もろ共に発足せん」とて、その夜は兼光・巴らを、庵に留めてこれをもてなし、夜更けて一人たち出でて、仰ぎて静かに天文を見るに、東方の房星盛んにして、北斗の光を奪ひしかば、覚明は思はずも、杖を捨てて嗟嘆に堪へず、「今や義仲・頼朝の両英雄、東北に旗を挙げて、共に平家を滅ぼさんとす。しかるに頼朝は東にあり、義仲は北にあり。房星盛んなるを見れば、その武運、頼朝に増すものなし。われ頼朝に従はゞ、大功虚しからざらましを、早まつて義仲の、求めに應ぜしこそ悔しけれ。ア、しなしたりく」と、一人慙愧に堪へざりしが、たちまちに思ひ返して、「天運かくの如しといへども、人多ければ天にも勝つべし。たとへ我、義仲に従ふとも、謀だに用ひられなば、頼朝也とて恐るゝに足らず。ア、しかなり」と腹に問ひ、腹に答へて又さらに、思案の臍をぞ固めける。

○かくて兼光・巴らは、大夫坊覚明を伴ふて、馬籠の城に帰りにければ、兼遠・義仲喜びて、やがて覚明に對面して、軍陣の駆け引きその余の事まで、頼み思ふ由を述べ示し、高禄を宛て行ふて、すなはちこれを軍師とす。又行家は親しき源氏なれば、客将として、覚明が次にをらしめ、今井・**○右の下へ**／＼**○左の上より**樋口・楯・根井を、須弥の四天に擬へて、これを四天王と稱へて上將とし、手塚・鐙田・巴を次將として、常に軍陣に従はしむ。こ、において義仲は、筑摩郡 御岳の辺に城を築きて、馬籠を出城とし、又同郡今井に寨を構へて、兼平を守將とし、松殿殿下の息女山吹姫を、迎へ取りて婚姻を整へ、常盤目 常成を、姫の傅きとして、その子常盤介 常国【虞子期】を、次將にぞしたりける。

◆義経、義仲に仕える

○この時、源九郎義経は陸奥にあり、兄頼朝と木曾義仲と、東北に義兵を起こして、平家を滅ぼさんと欲する由を、仄かに聞て思ふやう、「我が兄は他人を愛して、骨肉を疑ふ癖あり。我鞍馬寺にありし時、東より来る商人



(38ウ・39才 義経、素性を隠して義仲に出仕)

に頼みて、秘かに消息を参らせし事、二度三度に及びし

かども、一度も返り事を給はらざりき。しかるを今此ま、

にて、我が兄に從はゞ、いよく悔り軽んじて、用ひ

らるゝ事あるべからず。しばらく木曾に從ふて、人の耳

国(常国)「拙者なども新参者、常盤介常国でござ

る。

経(義経)「両大将の武威を慕ふて、推参いたせし

未熟の某。召し使はれなば一期の本望、大慶

◆／◆至極に存じます。

行(行家)「何九郎とやら、我らは行家でござる。

已後は見知つてもらひませう。

仲(義仲)「功あらば取り立て得ません。出精いた

してよく勤めよ。

遠(兼遠)「小利口らしい若者じや。大刀持ちは相

応々々。

覚(覚明)「人は見かけによらぬもの。とくと話し

て見ましたならば、力の程も知れませうぞへ。

目を驚かす、功名を顕して、後に〔次へ〕(38ウ・39オ)／
我が兄に従ふべけれ」と、思案をしつゝ、信濃路に馳せ
上り、頼朝の弟義経なる由は、はじめより深く隠して、
「奥の九郎といふ者、両大将の威風を慕ひて、平泉より
来たれり」と、言ひ入れしかば義仲・兼遠、呼び入れて
対面するに、いと小さな男にて、しかも反齒なりけれ
ば、心にこれを侮りて、大刀持ちにぞしたりける。義経
は小男にて、反齒なりける由は、阿弥陀寺本『平家物
語』に見えたり。

その時、軍師大夫坊覚明、義仲を諫めて言ふやう、
「某奥の九郎を相するに、並々の輩にあらず。大刀持
ちなどにし給ふことかは。重く用ひ給へかし」と、言
ふを義仲聞あへず、「件の九郎は年も若くて、且今参り
の者なるを、そがま、に用ひなば、たちまちに心驕りて、
古参の者に憎まるべし。もし功あらばこれを用ひん。さ
のみ急ぐことかは」と、応へて遂に聞かざりけり。

◆義仲、信濃宮を迎える

○その後覚明は、又兼遠・義仲に勧めて言ふやう、「先

に頼政卿死して、高倉宮も討たれ給ひしかば、義兵は
たちまち徒事となりて、味方も危ぶみ疑ふ者あり。か
つて伝へ聞候に、高倉宮に御子たち多くあり。治部卿の
局といふ女房の腹に、若宮・姫宮まじりけり。又奈良
にも、二柱の若宮をはしませしが、みな平家の為に捕ら
はれ給ひき。又一柱の若宮をはしませしを、高倉宮の
御乳人、夫婦の者具し奉りて、行方も知らず落ち失せたり
とぞ。早く件の若宮を尋ね参らせて、主君と仰ぎ奉らば、
義兵の名正しくして、人の思ひつく事多く、大事必ず成
就せん。この義を計らひ給へかし」と、言ふに兼遠も義
仲も、一義に及ばず受け引て、楯六郎親忠〔鍾離味〕は、
かやうの事に、心利たる者なれば、件の機密を説き示し、
「かの若宮の御在処を、尋ね求めて具し奉れ」と言ひ付
けて、北国へぞ遣はしける。

○さる程に親忠は、北国をあちこちと、残るくまなくう
ち巡りて、宮の御在処を尋ねつゝ、越中国、宮崎といふ
里を過ぎる時、年十ばかりなる男童の、繩に繋ぎて持ち
たる石亀を、里の悪少年とおぼしきが、やにはに奪ひ取

(39ウ・40オ 親忠、若宮に巡り会う)



りしかば、くだん件の男童をのわらは怨み怒りて、「世が世であらば、汝が如き匹夫のせがれ体に、辱めらる、我ならねども、神にも人にも捨てられたる、世の盛衰こそ口惜しけれ」と、言はせも果てず悪少年は、握り拳を振り上げて、**▲右の下へ** / **▲左の上より**男童の肩先を、はたと撃ちつゝ逃げ去りけり。男童は声を立てて、「あれよ〜」と叫ぶ程に、

桶ひんに似気なき優しい物腰。素性すげうを尋ねん、ウ、

そうじや。

童「おいらは知らぬ〜。

悪少「吠える癖に、意地の張つた餓鬼めだ。うぬらに渡して詰まるものかへ。

宮(若宮)「俺が亀を取つて打つたはいのふ。

女(重秀妻)「それじやによつて友達に、親しうせぬがよいはいの。□ / □人が笑ふにお黙り〜。

秀(重秀)「ハテ、亀を取られてもようござる。あんなものと▲ / ▲遊ぶが悪い。サア〜家へござれ〜。

その辺なる草の屋の内より、齢は五十ばかりにて、夫婦とおぼしき者走り出でて、男童を勞り賺して、やがて宿所へ伴ひけり。

親忠はつくぐと、かの男童の立ち振る舞ひを見るに、容はいたく窶れたれども、●／●匹夫下郎の子供に似ず。且件の夫婦の者も、物の言ひざま都人に似たり。「それかあらぬか」とばかりに進み入て、我が姓名を告げ知らせ、さて男童の素性を問ふに、はじめは隠して言はざり



(40ウ) 義仲、信濃宮を奉す

しを、義仲の密意の事、高倉の若宮を、主君と仰ぎ奉らん為、**次へ**(39ウ・40オ)／御在処を、尋ぬる由を告げにければ、主夫婦は喜びて、すなはちこの童は、高倉の御子なること、又あるじ夫婦は、「宮の御乳人にて、佐貫介重秀【王社長。▼妻は衛氏】と呼ばれし者也」と

告げ知らせ、高倉宮の御形見なる、蟬折といふ笛【▼『盛衰記』巻十五に見える】を、取り出だして見せしかば、親忠深く喜びて、重秀夫婦もる共に、若宮を具し奉り、やがて信濃へ立歸りて、こと云々と告ぐるになん、兼遠・義仲は、喜ぶ事斜めならず、忙はしく、礼服を整へて、若宮を迎へ奉り、重秀夫婦に対面して、そのもてなし大

宮(若宮)「げに頼もしき兼遠・義仲。○／○志は忘れぬぞや。

仲(義仲)「日ならず都へ●／■攻め上り、御位につけ奉らん。

遠(兼遠)「御心安く思し召されよ。

馬琴作

国安画

浄書金川

方ならず。にはかに城中に、別殿をしつらひて、そこを宮の御所ごしよと定め、今屋殿いまやどの「楚懷王」とた、へ申て、主君と仰ぎ尊敬そんきやうす。こ、をもて遠近えんぢんなる、野武士・浮浪人うらなに至るまで、兼遠・義仲に心を寄せて、相従はんと願ふ者多かり。かくてぞ勢ひはじめに増して、北国を討ち靡けたり。されば世に信濃しなの宮とも、又木曾宮きのそとも称ととへ申せしは、この若宮の御事おんじ也。

そもくこの物語は、▲下 ▲上より編数かずを重ねざれば、説き尽くすべくもあらず。これより後の事のちのこゝも共は、第二編に著すべし。二編も年内出版す。御評判々々々。

※左上 売薬広告

家伝神女湯(婦人血の道諸病の妙薬) 一包代百銅
近年薬種ますく高料といへ共、弥薬種を選みて、功能を違はざらしむ。敢へて利の為にのみせざれば也。
精製奇応丸(大包代式朱 中包代一匁五分) 小包代五分
薬種を選び、製方を詳らかにし、分量家伝の加減をもつてす。この故に、その功あたかも神のごとし。

熊胆黒丸(熊の胆汁を以丸す。多く糊をまじへず) 一包代五分
婦人つき虫の妙薬 一包六十四銅、半包三十二銅
つき虫はさら也、産後の下り物下りかぬるによし。
製薬本家 神田神明下同朋町東横丁 滝沢氏
弘 所 元飯田町中坂下南側四方の向裏 たき沢氏
取次所 両国横山丁二丁目売薬店 大坂屋半蔵

(40ウ)

▼初印本と思われる、林美一氏旧蔵本の第四冊の巻末広告「書林永寿堂新刻目録」と、後表紙見返しは、第二冊と同じ。本誌五四三号一三頁参照。

《初編解題》

一 執筆の経過

『漢楚賽擬選軍談』は、『通俗漢楚軍談』(十五巻。元禄八年刊)の物語を、我が国の源平争乱に移して翻案した長編合巻であり、ここでは木曾義仲が項羽、源頼朝が劉邦に、それぞれ「擬選」^{みなとく}られている。後年、大阪の書肆綿屋喜兵衛が後修本を刊行する際には、題号が「源平柏奇譚」^{ちのわげきだん}(題簽題)や「源平和漢染分」^{かからそのわけ}(内題)などと、「源平」を前面に押し出したものに改められた。

拙稿「墨川亭雪麿『傾城三國志』翻刻(一)」(本誌第五〇四号。平成27年)の「はじめに」でも記したように、『漢楚賽』起筆の契機となったのは、文政十一年正月における、板元永寿堂から馬琴に対する「女三國志」執筆の依頼であった。「傾城水滸伝」(文政八年〜天保六年、仙鶴堂刊)の盛行を羨んだ西村屋の申し入れを、馬琴は「我が真似を自ら」するようなものとして退け、別に

「通俗ものか演義もの」、すなわち翻訳のある白話小説か、もしくは中国講史小説の翻案を思い立ったのである。

同年二月二日には、西村屋から馬琴のもとへ「漢楚軍談一部」が届けられており(同日日記)、板元が用意した、この『通俗漢楚軍談』に基づいて、馬琴は『漢楚賽』を執筆したのである。本作初編は三月二十二日以前に起稿されたが、この頃の日記は息子の宗伯が代筆しており、そこに記された本作の執筆経過は、馬琴本人による記録に比べて具体性に欠ける。それでも、同月中に初編上帙(前半二十丁分)の執筆が終わり、翌月七日には同下帙が脱稿されたことを確認できる。

四月十六日以降、歌川国安の画稿や谷金川の板下筆耕が順次届けられ、馬琴はそれらの校止と並行して、六月十四・十五日に通俗本の巻二三を繕き、十六日からは第二編の編述に取りかかっている。第二編に関する執筆・刊刻の内情は、同編の紹介後に整理することとして、ここでは引き続き、初編が売り出しに至るまでの経過を跡づけてゆきたい。

六月二十六日には、初編巻一（五丁分）の初校が届けられたが、馬琴は西村屋に対して、校合は上帙二十丁分の彫刻が全備した後に行う旨を通告している。上下各帙の校合の経過は、以下の通りである。

○上帙 初校、9月10日到来、14日返送。再校、26日到来、28日返送。

○下帙 初校、10月3日以前到来、3日返送。再校、6日到来、7日返送。訂正確認、9日。

そして十月七日に上帙二冊、十四日に下帙二冊が売り出された。

なお、本編の袋（筒状のカバー）は、二枚ともポストン美術館に現存し、上帙のものには清盛（上部に秦始皇）、下帙のものには義仲（上部に楚王項羽）が描かれる。すでにネット上に公開されているが（<https://collections.mfa.org/>）、本稿の末尾にも掲出を予定している。

二 『漢楚軍談』の翻案

翻刻に併記した略注では、原作との対応を逐一説明す

ることができなかったので、ここでは改めて、本作と『漢楚軍談』との対応関係を整理しつつ、若干の補説を行いたい。以下においては、それぞれの章段について、本稿で施した見出しを掲げ、その下に『漢楚軍談』の対応する章段名（初出以外は短縮）を記した。見出しの記号を「◇」としたものは、『源平盛衰記』等から持ち込まれた、本作独自の展開である。『漢楚軍談』の章題には丸数字（①②……）を付して、各巻における配置を示した。

・上帙上

◇物語の発端

『漢楚賽擬選軍談』は、鎌倉長谷寺における「博士めきたる翁」の通夜物語として語り起こされる。その聞き手となるのは、「回国の修行者」と「三十ばかりなる女房」の二人であった。物語の外側に「梓組み」を設ける手法は、夙に歴史物語『大鏡』や、『太平記』巻三十五「北野通夜物語」などにも用いられたものである。

馬琴は長編合巻の第一作『金毘羅船利生纜』（こびろぶねりぢゆうのともづな）（文政

七年初編刊)において、その冒頭に「金野五平太といふ生もの知り」を登場させ、象頭山金毘羅権現の縁起に擬えた、白話小説『西遊記』の物語を説き起こしている。

また、読本『近世説美少年録』(文政十二年〜天保三年刊)が、弘化二年に「新局玉石童子訓」として続刊される際には、「架空先生と喚做たる生儒」が夢に見た『美少年録』の後日譚という「枠組み」が施された。特に『童子訓』の場合は、いまだ天保改革の余波が残る情況下において、「続き物」であることを目立たせぬための弥縫策として、刊刻の際に書き加えられたものである。

◆清盛の驕奢

巻一①「始皇巡狩望妖気」

◆清盛、東方に妖気を見る

巻一①「始皇巡狩」

◆清盛、畿島に参籠する

巻一①「始皇巡狩」

六丁表、平家の執権阿波民部大夫成良(田口氏・栗田氏)が、信西(藤原通憲)に『韓非子』を学んだとする設定は、法家思想を実践した李斯に、成良を擬えるための板構であろう。そもそも、信西と『韓非子』との結び付きも、『椿説弓張月』における馬琴の創作とされてい

る(日本古典文学大系『椿説弓張月』上(後藤丹治氏校注。昭和33年、岩波書店)、七五頁)。馬琴が李斯や法家思想を快く思っていなかったことは、以下のような記述からも察せられる。

李斯と韓非と、その師を共にす。かくて韓非は李斯に殺され、李斯は又、趙高に殺されたり。刻剥にして恩なきが故に、悪を佐て国を亡し、人を殺して自を殺す、豈誠ざらんや。李斯が始皇にまうしを乞へて、書を燬、儒を坑にせしは、『老子』をわろく見たればなり。『老子』に「民を愚にす」とあるは、自然に因れといふのみ。よしや書を燬、儒を坑にして、民を文盲にせんとすとも、政無為に因らずして、罪なきを殺す事、いかで老子の本意ならんや。かゝる故に、いく程もなく、秦は亡びたりき。

(『夢想兵衛胡蝶物語』後編巻四、十四丁表) 諸葛亮が忠信なる、人誰かしらざるべき。しかれども、その『韓非子』に拠るをもて、後世これを瑕玷とす。(『朝夷巡島記』初輯巻二、九丁表)

六丁裏・七丁表において、清盛が嚴島に宝劍「小鳥」を埋め、その上に「武徳碑」を立てる一件は、『漢楚軍談』の「始皇、ゲニモトテ、直チニ東国ヲ巡行シ、鄒嶧山ニ登テ、石ヲ立テ功徳ヲ録シ、東嶽太山ヲ封ジテ、自ラ帶セラレタル太阿ト云宝劍ヲ、山ノ麓ニ瘞メ、」(以下略。卷一、二丁表) という記述を翻案したものである。

名刀「小鳥」は、『平家物語』などにおいては貞盛の将門追討以来、平家に伝わる名刀とされているが、「剣の巻」は源為義の命で作られたとする異説を伝えており、馬琴はこの記事を、読本『昔語質屋庫』(文化七年十一月、文金堂等刊) 卷之一「第二 友切丸」の中に引用する。また、『南総里見八犬伝』第五輯(文政六年、山青堂等刊) 第四十五回においては、犬山道節が仇敵扇谷定正に接近すべく、名刀村雨丸の鋭利さを、以下のように説き誇っている。

抑この大刀の鋭ことは、陸には犀象を砍るべく、水には蛟竜を截といふ、唐山の竜泉・太阿、我朝の小鳥・蒔鳩、鬼丸・竜尾なシト聞えしも、なほこの

右に出べからず。(巻之四、三丁表)

ここでは、「小鳥」が「太阿」と併称されており、『漢楚軍談』における「擬選」の背景には、このような馬琴の認識が存したのである。

なお、本稿「その1」(本誌五三九号)の中で、二人の童子が「小鳥」を奪い合う場面の挿画(七丁表)について、その言葉書きにあらわれる「とちぼう丸」を「未詳」としたが、これは「ち」が濁音であることに思い至らなかった、稿者の失考である。『歌舞伎登場人物事典』(平成18年、白水社)に、「箱根の閉坊」(古井戸秀夫氏執筆)として、以下のように説明されている。

江戸の曾我狂言に登場する人物。箱根権現の稚児。箱根の山を下りて鎌倉に出る。文化三(一八〇六)年正月中村座『念力箭立相』で市川男女蔵が小地獄の閉坊という乞食坊主の修行者に扮して、実悪の登場人物にした。

伊原敏郎『歌舞伎年表』(岩波書店)を眺めると、延享二年(一七四五)十一月、中村座の「扇 伊豆日記」

に「閉坊」を見出しうるが、これは「閉切丸」の誤りかも知れない。その次は、明和三年(一七六六)二月の市村座「咲増花相生曾我」の「閉坊」で、これは大藤内のために薄緑の太刀を盗み、復命後に殺されるという役廻りである。天明四年(一七八四)二月の森田座「初曆開 曾我」では、八代目森田勘弥が「箱根閉坊丸」を演じているが、その詳細は明らかでない。

◆清盛、仙丹を求める

卷一①「始皇巡狩」

◇重盛、如福に祠堂金を托す

◆廬生、熊野で仙人に会う

卷一①「始皇巡狩」

◆清盛、仙書を読み誤る

卷一①「始皇巡狩」

◆重盛、熊野へ退けられる

卷一①「始皇巡狩」

◆廬生、生き埋めに処される

卷一①「始皇巡狩」

『漢楚軍談』の廬生は、「仙書」を持ち帰ったばかりで、本作の「廬生」のように、恨み言を咎められて「生き埋め」に処されることはない。廬生の刑戮は、清盛による「焚書」を導き出しており、ここには作品の構成を密にしようとする、馬琴の配慮が見て取れる。

・上映下

◆妖童の童歌

卷一③「趙高矯詔立胡亥」

原作では、始皇帝の東国巡狩の途次、東郡に落下した隕石に、「始皇死而地分」という文字が刻まれていたことから、近隣の居民がことごとく誅殺されている(『史記』始皇本紀にも)。馬琴はこれを「鳥羽の恋塚」における妖童の童歌に転じたのであろう。

◇刀狩りと福原の鉄人

◆親良の雌伏

卷一②「張良下邳遇黄石公」

十一丁裏、親良が身を寄せる「長瀬判官代」は、架空の人物と思われる。『平家物語』諸本には、「長瀬判官代重綱」が現れ、『源平盛衰記』のみはこれを「義員」とする。本作の「義定」は、『盛衰記』の「長瀬判官代義員」に想を得た命名であろう。

◆親良、蒼海九郎と出会う

卷一②「張良下邳」

◆清盛、東国巡行に旅立つ

卷一②「張良下邳」

本稿「その1」一一二頁下段、「二世皇帝胡外」は

「胡亥」の誤りである。

◆義仲、清盛の行列を窺う

巻一③「趙高矯詔」

◇頼朝も行列を窺う

原作において、劉邦の登場は始皇帝の没後であるが、馬琴はこれを早めて、頼朝にも清盛の行列を見物させている。その際に頼朝が口にした、「大夫(二丈)脱(一)たらん者、まさにかくの如くなるべし」(十四丁裏)という言葉は、原作『漢楚軍談』には見えず、『史記』高祖本紀から劉邦の言葉を襲用したものである。

◆蒼海九郎、清盛を襲撃する

巻一②「張良下邳」

◆義経の雌伏

巻一⑥「范増献策立楚後」

義経の登場も、原作の韓信より早められている。十六丁表で、「四屋丸太郎」が義経を世話する一件について、『漢楚軍談』には対応する記述を見出せず、馬琴は『史記』淮陰侯列伝から、「南昌亭長」の話を持ち来たったようである。

◆義経、苛八の股をくぐる

巻一⑥「范増献策」

◆鬼一法眼、義経を試す

巻一②「張良下邳」

『漢楚軍談』の張良は、本作では親良ちかよしに擬されているが、作者馬琴も本編の序文において、「譬は下邳かひの圯橋いせうの張良ちやうりやうは、牛若うしわかならねば、不可なるが如し」と記すように、ここでは源義経が、黄石公に擬えた鬼一法眼から兵書を授かっている。

十八丁裏・十九丁表に、「鬼一が事は異伝あり、それは後々の編に至りて、詳つまひらかに記すべし」とあるものの、本作が未完に終わったため、鬼一法眼の死やその「異伝」は、語られることがなかった。

◆清盛のあつち死

巻一③「趙高矯詔」

◆長高らの計略

巻一③「趙高矯詔」

・下帙上

◇弁慶・亀井・片岡ら、義経に臣従する

原作『漢楚軍談』には、韓信が家臣団を形成する物語は見えない。弁慶が当初「鰐淵寺わだづみ」の学侶であったとする説(二十一丁裏)は、『和漢三才図会』巻七十八などにも見え、近世期には広く一般に行われていた。

◇義経、越後に至る

◆重盛、陥れられる

卷一③「趙高矯詔」

◆宗盛、遊興に耽る

卷二④「趙高指鹿為馬」

本稿「その2」で、二十六丁表の宗盛を「扶蘇」としたが、これは「胡亥」の誤りである。

◆頼朝、時政の婿になる

卷一④「劉邦芒碭山」

二十六丁裏・二十七丁表において、稲毛重成が頼朝の相婿となるのは史実の通りであるが、本編序文にも「頼朝の臣、時政の婿に、樊噲の如きものなく」とあるように、重成が樊噲に「擬選」られるのは、この場限りの趣向である。本作第三編では、「鴻門の会」における樊噲の役割を、弁慶が担当している。

◆頼朝、大蛇を斬る

卷一④「劉邦芒碭山」

頼朝が大蛇を斬る太刀は、源氏の名刀「髭切」であるが、この刀についても、『昔語質屋庫』の「友切丸」に、「か、れば友切丸の初の名は、鬚切といひつるを、頼光のとき、鬼切と改名し、為義又、獅子の子と改め、更に友切と名づけたるなり」(卷之二、十六丁表)とある。

◆源三位頼政、拳兵する

卷一④「劉邦芒碭山」

◆義仲、拳兵する

卷一⑤「項羽会稽城興兵」

二十九丁裏・三十丁表の義仲について、本稿で「言葉書きなし」としたのは稿者の見落としてであり、実際には以下の詞書が添えられている。

仲(義仲)「時は得がたくして失ひやすし。此勢ひ

を抜かずして、近郷を討ち取らん。各々用意が

肝要々々。

◆頼朝、山木兼隆を討つて拳兵

卷一④「劉邦芒碭山」

この一段に翻案された、矢文をもって敵城内の謀反を誘発する計略は、『南総里見八犬伝』肇輯(文化十一年十一月刊)第五回でも、里見義実が滝田城攻略の際に用いている。

・下駄下

◆兼遠・義仲、因通を討つ

卷一⑤「項羽会稽城」

ここで兼遠らに討たれる「信濃前司因通」は、原作の「殷通」に擬えた架空の人物であり、「殷通」を同音の

「因通」に改めて名前としたようである。

◆桶・根井、義仲に従う 巻一⑤「項羽会稽城」

◆義仲、碓井馬と山吹姫を得る 巻一⑤「項羽会稽城」

「山吹」は、『平家物語』で義仲に仕えた「美女」(流布本。覚一本では「便女」)の名である。本作で山吹姫の父親とされる藤原基房は、清盛により備前に流されたが、のちに義仲と結んだ人物で、『盛衰記』巻三十五においては、義仲に娘(無名)を強奪されている。

◆行家、義仲に服す 巻一⑤「項羽会稽城」

◆頼政の最期 巻一⑥「范増献策」

頼政に擬えられた陳渉の最期は、原作では簡単に言及されるのみである。

◆義仲、覚明を軍師とする 巻一⑥「范増献策」

三十八丁表に描かれた額の文句「指月忘指」は、『楞嚴經』などに見える、月を「法」、指を「教」に比喻した表現と関連がある。謡曲『放下僧』に、「妻恋ひかぬる小牡鹿の、佇む月を山に見て、指を忘る、思ひあり」という文句がある。

◆義経、義仲に仕える 巻一⑥「范増献策」

三十九丁裏で言及される、『平家物語』の「阿弥陀寺本」は、今日一般に長門本の別称であるが、馬琴は「平豊小説弁」(文政八年執筆)の中で、両本を異なる伝本とする。義経の容姿に関する記事は、長門本巻十八に見える。

◆義仲、信濃宮を迎える 巻一⑥「范増献策」

「信濃宮」をはじめとする、高倉宮の御子については、『源平盛衰記』巻十五「宮御子達」に記事がある。ただし、「奈良にも、二柱の若宮」(四十丁表)とあるのは不審で、あるいは『盛衰記』の「南都二モ宮(稿者注、以仁王)ノ御渡アリ。盛興寺ノ宮ヲバ書写ノ宮トゾ申ケル」という記述を、馬琴は「盛興寺ノ宮」「書写ノ宮」二人のことと読み誤ったのかも知れない。

なお、本稿における『源平盛衰記』からの引用は、中世の文学『源平盛衰記』(三弥井書店、刊行中。底本は慶長古活字版)に拠る。

○付記

本稿は、近世文学研究会における稿者の発表資料、ならびに同会席上の質疑にもとづくものである。

近世文学研究会については、船戸美智子氏による紹介文（東西研究会案内「得もなく損もなく」。江戸文学15号。平成8年）に、その沿革が紹介されている。東京大学ではじめられた、この江戸文学の輪読会は、活動の中心であった水野稔先生が明治大学文学部に着任されて以降、長らく本学において開催されていた。その後、会場は共立女子大学に移り、稿者が参加しはじめた平成四年頃には、内田保廣先生が幹事を務めておられた。

怠惰な大学院生であった稿者には、なかなか発表の順番が回ってこず、平成十六年に至つてようやく、本作を講読する機会を与えられたのである。当時、会場は青山学院女子短期大学に移っており、幹事は本学出身で水野先生門下の鹿倉秀典氏であった。稿者の不手際は無論のこと、長唄詞章集『常盤友』（とまわのとも）（明和三年刊）の輪読との二本立てであったこともあり、『漢楚賽』の講読は遅々として進まず、結局平成十九年十月まで十八回をかけて、本作初編を読み終えることができた。稿者の発表期間には、会の参加者が減少傾向にあり、途中で打ち切ることも考えたが、鹿倉氏からの励ましもあつて、何とか四十丁を完遂したのである。

その後、近世文学研究会は翌平成二十年七月まで開催されたが、鹿倉氏のご病気ゆえに休会となり、平成二十六年十一月の同氏ご逝去を経て、今日に至るまで再開されていない。

今回、十年以上放置してあつた資料のデータを見直してみると、予想以上に誤りや存疑箇所が多く、それらは本稿においてもお残存している。本稿（一）から（三）までの補訂は後日を期することとして、次回からは新たに『漢楚賽』第二編を紹介していきたい。